

# 大学教育とKJ法

## —— 一般教育の演習科目における KJ法活用の試み(1) ——

高 倉 良 一

### 目 次

1. はじめに
2. KJ法導入の背景
  - (1) 演習科目に内在する問題点
  - (2) KJ法導入の意図
3. KJ法の紹介
  - (1) 創造的問題解決技法としてのKJ法
  - (2) W型問題解決モデル
  - (3) 狭義のKJ法1ラウンド
4. KJ法導入のプロセス
  - (1) 問題意識の形成
  - (2) レポート図解の作成
  - (3) 問題意識の共有
  - (4) 日帰り合宿
  - (5) レポートの提出(以上, 本号)
5. 実践結果と考察(以下, 次号)
6. おわりに  
参考文献

### 1. はじめに

大学教育の主たる目的の一つは、自立した個人の育成、すなわち、「社会において問題を実践的に解決しうる知的能力をもった一般市民の養成」<sup>(1)</sup>であり、大学とは、自立し、自分で判断する力を養う場であるといえよう。

このような目的を実現する上で、筆者は、KJ法の活用が有効ではないかと考えた。なぜならば、KJ法は、多くの現象の相互関係を整理し、的確な判断をするための思考の論理を備えた問題解決の技法だからである<sup>(2)</sup>。

筆者は、昭和62年度に、香川大学で「現代家族と法」というテーマで開設し

た一般教育科目の演習科目において、KJ法の積極的な活用を試みた<sup>9)</sup>。本稿では、演習での実践内容を紹介するとともに、参加した学生諸君がKJ法を用いて作成した図解とレポートとを素材として、一般教育科目としての演習科目で、KJ法の活用がどのような意義を持つかを考察することにした。

- (1) 米山喜久治「野外科学を基軸とした大学ゼミナール・システム」KJ法研究創刊号168頁(1978年)
- (2) KJ法については、川喜田二郎『KJ法—渾沌をして語らしめる』中央公論社(1986年)が最新刊のまとまった文献であり、いわば「原典」である。詳細は、この文献を参照されたい。ただし、KJ法は、文献を読むだけで内容を理解することは困難である。すなわち、「この本をいかほど読んでも、それだけではKJ法を体得できない。すなおな道に通ずる研修コースの受講と、本番の仕事での実践の積み重ねが必須である。それがなくては所詮量の上の水練である。」(同上、まえがきv)と指摘されているのである。筆者は、後述の通り、これまで種々の研修を受けており、今回の演習におけるKJ法の活用は、その体験を基にしている。
- (3) 大学教育におけるKJ法の活用に関しては、米山教授が、前掲「野外科学を基軸とした大学ゼミナール・システム」161頁以下で報告されている。同教授は、KJ法を専門科目としてのゼミナールで活用されているようである。この報告以外には、大学教育において、KJ法が活用されているという研究は、これまでのところ、KJ法学会では発表されていないように思われる。ただし、大学以外の教育現場では、KJ法は積極的に活用されており、かなりの成果を収めているように思われる。これらの成果については、後述の参考文献の中で紹介することにした。

## 2. KJ法導入の背景

### (1) 演習科目に内在する問題点

香川大学で、筆者は、これまで、61年度と62年度の2回、一般教育科目としての演習科目を担当する機会に恵まれた。この科目は、「セミナーを主とする授業」であり、「学生の自主的自発的な学習意欲と共同研究の姿勢とが重要な要素」とされている科目である<sup>10)</sup>。しかも、「担当教官があらかじめ主題と計画

の概要を示すが、研究学習の進行の過程で計画を討議し、修正することがあってよい。」<sup>(2)</sup> という柔軟な運営のできる科目である。筆者は、このような目的の実現に向けて、61年度は「現代家族と法」というテーマで、2単位の演習科目を、昭和61年の10月から翌年の2月までの期間、週1回100分で13回にわたって開設した。

この演習では、前半の数回は、家族問題を分析した文献の輪読を行ったのであるが、必ずしもその目的を達成しているとは言い難いような状況に遭遇することとなった。その主たる原因としては、筆者自身が、これまで一般教育科目としての演習科目を受講した経験がないため、その要領がつかめず、試行錯誤の連続であったということがあげられるが、その他の原因としては、この演習科目が一般教育科目として開設されているという点と、その結果として、多学部多学年の学生が混在するという点があげられよう。

この科目は、一般教育科目であるため、参加者があらかじめ有する知識の量や問題関心が統一されていないのである。すなわち、各学部における専門科目の演習の場合には、その参加者は、基礎的な知識を習得していることが前提とされている場合が多いと思われる。例えば、法学部で民法の演習に参加する学生は、その大多数が民法の講義をある程度は受講していることが前提とされている場合が多いと思われる。ところが、一般教育科目としての演習の場合には、参加者がその科目に関する基礎的な知識を有しているとは、必ずしも言えないように思われるのである。

しかも、この科目の受講者は、その所属学部も学年もバラエティに富んでいる。61年度の演習には、1年生から卒業を間近にした4年生までの20名の学生が参加していたのであるが、その所属学部は、法学部、経済学部、農学部の3学部に及んでいた。その上、参加者の中には、他の演習を希望していたが、その科目が定員を満たしていたため、不本意ながら、筆者の演習を受講することになった者も若干名存在したのである。

## (2) KJ法導入の意図

このように、知識量や問題関心および受講の動機が異なるため、当初の予定

通り、文献の輪読を継続しても、この演習科目の目的である「自主的自発的な学習意欲」を薫発することは困難ではないかと思われた。そこで、演習の後半は、当初の予定を変更し、川喜田二郎博士の考案されたKJ法を紹介し、その技法を習得するための訓練を行うことにした<sup>9)</sup>。その上で、各参加者に、現代家族の問題点をKJ法でまとめて発表してもらうことにしたのである。

ゼミにKJ法を導入した理由は、参加者に出来るだけ共通の問題意識を持たせるとともに、思考の方法論が明確になり、活発な議論が交わされるようになるための方法として、KJ法の活用が有効ではないかと考えたからである。61年度は、その当初からKJ法を活用するつもりではなく、時間不足の感があったが、この試みは、ある程度の成功を収めたように思われた。

そこで、62年度の演習においては、当初からKJ法の活用を前提としてゼミを開設した。そのテーマは、前年度と同一であったが、その運営は種々工夫をこらした。すなわち、この科目を受講することによって、KJ法の基礎的な技法を受講者が習得するとともに、家族問題に関する問題意識を深め、各参加者が、主体的に問題状況を整理できるようになることを目標としたのである。

- (1) 香川大学一般教育部『香川大学一般教育修学案内』昭和62年度42頁参照
- (2) 同上書42頁
- (3) 筆者は、川喜田研究所の主催する研修講座で、昭和53年12月に前期師範科コース（教育者コース）、昭和54年5月に中期師範科コース（取材学コース）の研修を受けている。前者は、後述するW型問題解決モデルにそって作られた6ラウンド累積KJ法の前半部分である、問題提起ラウンド、現状把握ラウンド、本質追求ラウンド、評価の研修で、3泊4日間に及ぶ研修である。後者は、内部探検からの取材、面接からの取材、討論からの取材、自由面接からの取材、データベース化、探索システムの作成に関する研修で、2泊3日間に要するものである。これらはいずれも期間中は徹夜の連続という研修であった。その後、現在に至るまで、毎年開催されているKJ法学会とKJ法経験交流会にも度々参加しており、筆者のKJ法活用歴は約10年になる。今回のゼミでの学生に対する指導は、このような体験を基礎にして行ったものである。

### 3. KJ法の紹介

#### (1) 創造的問題解決技法としてのKJ法

KJ法は、川喜田二郎博士が、海外で異民族の調査をされた際の体験から生み出された技術と、「参画的・創造的社会への文化づくり」を目指す思想とが融合した創造的な問題解決の「技術であり、思想であり」<sup>(1)</sup>、「過去から未来につながる文明についての深い洞察に裏づけられた科学的・実践的な創造性開発の方法」である<sup>(2)</sup>。人間は、問題解決、つまり「一仕事の達成を通して創造的産物を生むと同時に、自らも成長するという思想にささえられた技法がKJ法」<sup>(3)</sup>であり、それは、「ひと言でいうなら『バラバラな情報をまとめる方法』」<sup>(4)</sup>である。

この方法は、その当初は「紙キレ法」と呼ばれていたが、後に、同博士の姓名のイニシャルが正式の名称とされるようになったものである<sup>(5)</sup>。

KJ法は、これまで、創造性開発の方法論として、また、職場を活性化し、チームワークを育成する手法として、極めて有効であると評価され、企業を中心に、様々な組織で広く活用されている<sup>(6)</sup>。そして、現在では、発想方法や取材方法などの多岐にわたるノウハウが開発されており<sup>(7)</sup>、最近では、パソコンを使ってKJ法を行うシステムまで開発されつつある<sup>(8)</sup>。本稿では、KJ法の基本的構想と、今回、演習で用いた技法を紹介することにした。

#### (2) W型問題解決モデル

さて、川喜田博士は、これまでの科学を、方法論を基準として、「書齋科学」「実験科学」「野外科学」の3つに分類するとともに<sup>(9)</sup>、問題解決、すなわち、「一仕事」のプロセスを12段階に整理している(図1)。そして、これら3つに大別された科学と、「一仕事」との関係を図解化し、それを「W型問題解決モデル」と命名している(図2)。KJ法は、このW型問題解決モデルを念頭に置きつつ、具体的には、一定のテーマに関する多種多様な異質のデータを収集し、それらをKJ法のルールにしたがってまとめ、「データをして語らせて」統合

し、問題の解決を目指すのである<sup>(10)</sup>。以下、その内容を説明することにした。

まず、川喜田博士は、「科学は次の3つに大別することが重要である。それは書齋科学、実験科学、および野外科学という言葉で呼ぶのがふさわしいであろう。」<sup>(11)</sup> との認識を示し、それぞれの科学の特徴を、次のように説明する<sup>(12)</sup>。

書齋科学は、「一方では文献に依存しながら、他方では推論過程を重要視する」科学、すなわち、「体系づけられた形の情報になっている文献」に依存するとともに、「論理的なつながり、推論過程を重要視する」科学である。そのため、他の科学は、「現実の経験と観察が重要な基盤をなす」のに対して、書齋科学は、「現実界を観察しないで、一応学問が成立していた。」とされる。

実験科学は、「実際に現実界のものに触れて、観察したことを重要な拠りどころにする。すなわち、経験科学的な面をもって」おり、その方法の核心は、「実験装置をつくって仮説の指し示すところを観察し、その結果によって仮説を検証するところにある。」とされる。

表1. 対象とする自然の差に基づく実験科学と野外科学との対照

出典 川喜田二郎『発想法』(中公新書) 13頁

実験科学	実験室的自然	野外的自然	野外科学
○閉鎖的 ←	○実験室内 ←	○野外 →	○開放的
○自然を作り出す (制作的)	○人工的 ←	○ありのまま →	○自然を作りださない (認識的)
○固定的設備装置 が必要	○統御されている ←	○統御が利かない →	○携行器具が必要
○仮説が分類ワク を要請	○要素化が容易 ←	○要素化が困難 →	○データが分類ワク を暗示
○探索 ←	○探しものが判っ ている	○何が必要か判ら ない	○探検
○分析的 ←	○単純 ←	○複雑 →	○総合的
○観測 ←	○測定可能 ←	○測定不可能 →	○叙述的または描 写的観察
○追試ができる ←	○反復的 ←	○1回の →	○追試ができない
○法則追求的 ←	○非個性的 ←	○個性的 →	○個性把握的
○ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">仮説検証的</span>			○ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">仮説発想的</span>

野外科学は、「実際の観察と経験を重要視する」点では、実験科学と共通しているが、実験科学が観察し経験する場所は、実験室であるのに対し、野外科学は、その場所が野外であり、このことが、方法論の違いを生ぜしめる(表1)とされる。すなわち、野外科学は、「分析的研究をするためには適しない対象であり、きわめて複合的な性格を持っている」ありのままの自然を観察の対象としているのである。しかも、「実験科学は仮説を検証するところに重要な性格がある」のに対して、「野外科学はむしろその仮説をどうして思いつけばよいかという、仮説を発想させる方法と結びついているのである。」と指摘される。

このように科学を分類された上で、「KJ法の位置づけは、広くいえば、野外的科学的方法であり、そのなかの、とくに発想法部分、そのなかのさらに中核的技術として位置づけられる。」のである<sup>(13)</sup>。

また、川喜田博士は、人間の創造的行為、すなわち、問題解決を「一仕事」と定義して、その構造は次のように説明されている<sup>(14)</sup>。

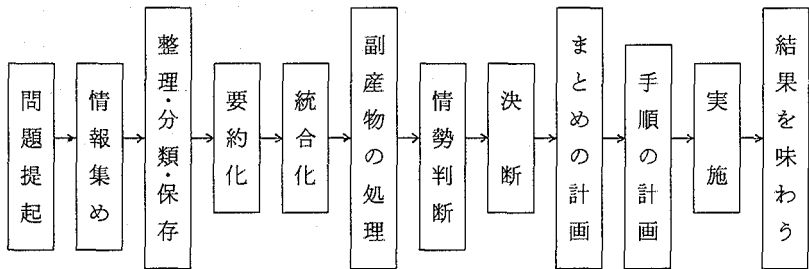


図1. 一仕事の12段階

出典 川喜田二郎『チームワーク』34-5頁

「一仕事」の第1の段階は、「問題提起」つまり「いかなる仕事の課題をとりあげるか」であり、次に、「その問題に関係ありと思われる情報を、いかに集めるか」という段階がくる。第3は、「集めた情報の整理・分類・保存」の段階があり、さらに、これらの情報をまとめる段階がある。このまとめは、「主として同質的な情報を要約化」する段階と、「質の異なる情報を組み立てて、そこに意味を見いだす情報統合化」の段階がある。

さらに、このように情報をまとめていくプロセスの中で、「はじめにとりあ

げた問題の提起と関係がないかもしれない」が、「しばしば意外な、そして関心をそられる事実」が発見されることがあるので、その際には、第6の段階として、「副産物処理」の段階を認めねばならないとされる。

そして、情報の整理が終了したら、「情報に価値判断を加える」情勢判断の段階がくるとされ、その上で、「決断」、つまり「この情勢判断に基づいて、われわれは仕事をなすべきか否かを決定する」段階に到達するのである。

この判断の後に、「計画の全貌ともいべき仕組み、あるいは、計画が達成されたときにはこういう形に落ちつく」ということを明らかにする第9段階の「まとめの計画」と「このまとめの計画を、どこから着手し、どのような手順で実行に移していくかという」プログラムを策定する「手順の計画」が第10段階として、続くのである。

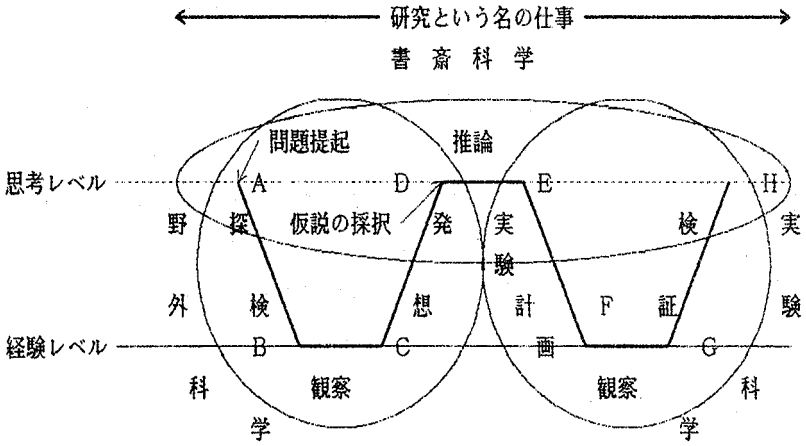
このような計画が立案された後に、第11の「実施」の段階が訪れ、最後に「結果を味わう段階」を迎えるのであると説明される。

さて、前述の科学の方法論と、以上のような一仕事の構造の認識を前提として、「われわれが足もとの『一仕事』を完全にやるときには、すでにこの3つの方法のすべてが必要なのである。」とされる<sup>(15)</sup>。そして、このような判断の下に、「研究」という「一仕事」の構造を図解化したものが、W型問題解決モデル（図2）なのである。

まず、W型図解の、上の点線部分は、頭の中で考えるレベルを意味し、下の実線の部分は、現実の世界に触れて観察をするレベルを意味している。川喜田博士は、「研究」とは、この両者の間を往復しながら進めて行くものであると主張している。すなわち、「科学的に研究の一仕事を果たすということは、ほぼ太線で描かれたA→B→C→D→E→F→G→Hの過程として示される」と述べている<sup>(16)</sup>。そして、そのプロセスを以下のように説明している<sup>(17)</sup>。



図2. W型問題解決モデル



出典 川喜田二郎『発想法』(中公新書) 22頁

「まず頭の中 (A点) で問題を提起し、次いで、その問題に関係がありそうな情報を探検にいく (A→B過程)。それにつづいて、個々の現象が観察され記録され (B→C), こうして集めた情報をなんらかの形でまとめる (C→D)。この途中で、多くの仮説が発見される。その結果、問題提起とにらみあわせて、なんらかの仮説が採択される (D点)。次いで、もしその仮説が正しければ事態はこうなるはずであると、頭の中で推論が展開される (D→E)。さて、推論通りに現実になっているかどうかをテストするために実験計画を立てられ (E→F), それに基づいて実際に観察と記録が行われる (F→G)。このデータに基づいて、仮説が正しいかどうかを検証され (G→H), 結論 (H点) に到達するのである。」

以上のような過程を、書齋科学・実験科学・野外科学に当てはめると、「書齋科学は問題提起を頭の中で行い、次いで推論過程に重きを置いて結論に到達するのであるから、それはA→D→E→Hという過程となる。これに対して実験科学の重点は仮説検証型であるから、もちろん問題提起 (A点) からスター

トするとしても、主として $D \rightarrow E \rightarrow F \rightarrow G \rightarrow H$ なのである。これらに対して野外科学の重点は仮説発想型であり、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ の部分となるであろう。」とされ、「完全な科学の全過程としては、前記の3方法が関連的に首尾一貫して必要」であると主張される。

その上で、「その中でも特に今まで最も隘路となったのは、 $(C \rightarrow D)$ の部分」であり、このプロセスでは、「『きっこうであろう』といった既成概念や通念、思いつき、どこかから借りてきた仮説や理論、さては『こういう結果を出したい』といった希望的観測などによってデータをまとめる」のではなく、「データをして語らしめる」という作業が必要であると主張し、「この問題に正面から挑んだのがKJ法である。」と述べている<sup>(18)</sup>。

### (3) 狭義のKJ法1ラウンド

さて、前述の「データをして語らしめる」ための具体的な技法の最も基本となるKJ法の一巡工程は、「狭義のKJ法1ラウンド」(図3)と呼ばれ、W型問題解決モデルの $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ の部分に該当している。今回の演習では、参加者が、この技法を習得することを、主な目的の1つとしたのである。以下、その内容を説明することにしたい<sup>(19)</sup>。

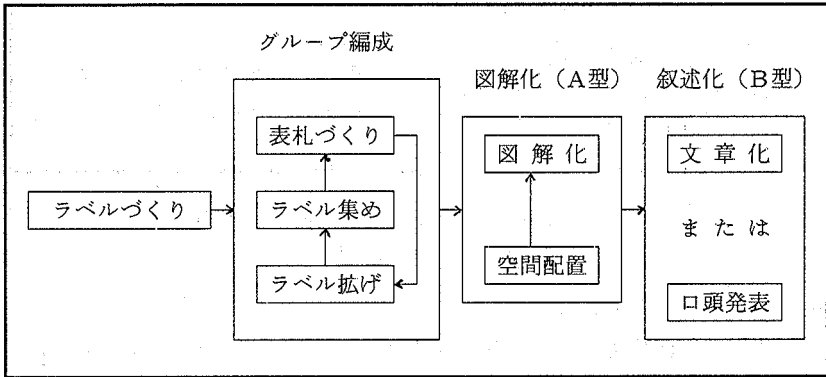
さて、狭義のKJ法1ラウンドは、(1)ラベルづくり、(2)グループ編成、(3)図解化、(4)叙述化の4つのステップを順次踏んで行われる。

まず、ラベルづくりは、以下のような手順で行う。テーマに関連があると思われるデータを、ラベルに記入する。その際、1枚のラベルには、1つの内容に関する事柄を記入することが原則とされ、「ひとつのラベルに書かれたデータが、全体として訴えかけにひとつの中心性を持っていること」、すなわち、「各1枚のラベルが、1つの『志』をもつ」ことがルール化されている。このように、まとまりのある1つ1つのデータを、それぞれ1枚1枚のラベルに記入するのである。

つぎに、これらをグループにまとめる作業を行う。この作業はグループ編成と呼ばれ、(1)ラベル拡げ、(2)ラベル集め、(3)表札づくりの3つのステップから構成されている。

図3. 狭義のKJ法1ラウンド

出典 川喜田二郎『KJ法—渾沌をして語らしめる』中央公論社123頁



まず、データを記入したラベルを目の前に全部並べ、それらの中で「このラベルとあのラベルとは、志が非常に近い。お互いに似ている。少なくとも、他のどのラベルよりも、このふたつのラベルは同類の志を持っている」と感じられるラベルを集めるのである。この作業がラベル集めである。このようにして集まった数枚のラベルについて、「集まったゆえんの内容を別のラベルに要約し、要約したラベルをいちばん上にのせ、そのセットをクリップか輪ゴムで束ねる」のであるが、この作業が表札づくりと呼ばれ、「KJ法1ラウンドの諸作業中、最もむずかしい作業」であり、「この作業が的確であるか否かで、1ラウンドのまとめの成否が最も決定的に左右される」のである。図4は、ラベル集めと表札づくりの実例である。

このような表札づくりが一通り終了したら、再び、これらのグループ編成をして束ねたラベルを拡げ、似ていると感じるものを集め、それらを要約する表札をつくるのである。このようにして、数十枚のラベルが数束以内になるまで、この作業を繰り返すのである。

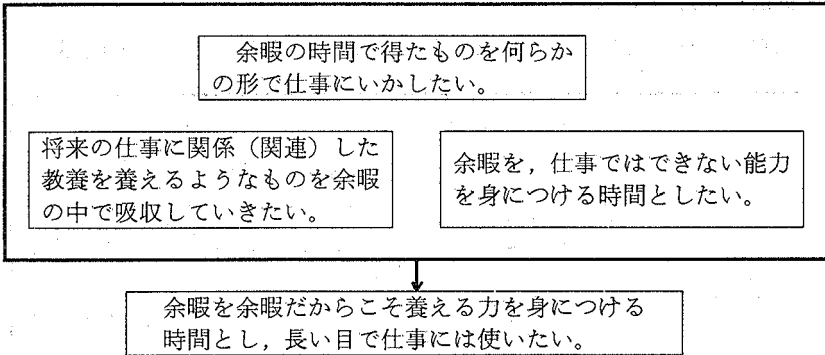


図4. ラベル集めと表札づくり

出典 山浦晴男「表札作り実例講座(14)」K J法友の会編『積乱雲』第22号(1982年)22頁以下

図解化の作業は、グループ編成でまとめたラベルを、模造紙に意味の上で最も判りやすい位置に並べる作業である。すべてのラベルを配置し、紙に貼りつけ、それぞれのラベルの関係が理解し易いように種々の関係を示す記号等を記入するのである。

このように、「図解化して判ったことを、さらにストーリーとしてみる。これが叙述化である。この叙述化には二通りの方法がある。ひとつは文章化であり、もうひとつは口頭発表である。」<sup>(20)</sup>。すなわち、前者は図解を基にしてレポートを作成する作業であり、後者は図解を口頭で説明する作業である。

以上が、K J法の最も基本的な内容である。他にも、今回の演習ではK J法の技法を用いたが、それらはK J法導入のプロセスの項で説明することにした。

- (1) K J法は、「技術から思想までを連続スペクトルとして扱う」方法であるが、技術であると同時に思想であるという理由は、前掲『K J法—渾沌をして語らしめる』440頁以下で詳細に述べられている。
- (2) K R I川喜田研究所「K J法研修講座・昭和63年度ご案内」12頁参照

- (3) 川喜田二郎編監修『組織ポテンシャルの向上』(KJ法実践叢書①)プレジデント社(1984年)24頁
- (4) 同上書14頁
- (5) KJ法の名称の由来については、前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』212頁参照
- (6) KJ法は、組織の活性化ばかりではなく、実に様々な場面で活用されている。例えば、国立精神衛生研究所精神衛生相談室長の丸山晋「神経症・心身症を治すKJ法的精神療法」川喜田二郎編監修『人間のルネッサンス』(KJ法実践叢書②)プレジデント社(1984年)39頁
- (7) 現在、KJ法本部が主催している研修講座は、8コースにも及んでいる。それらは、問題解決の基本技術、取材力の強化、企画・文章の作成法およびプロジェクト・マネジメントなど、種々の技法の習得を目的にしている。詳細は、前掲「KJ法研修講座・昭和63年度ご案内」4頁以下参照
- (8) KJ法友の会編『積乱雲』第41号(1988年)12頁
- (9) 川喜田二郎『発想法』(中公新書)中央公論社(1967年)6頁
- (10) 前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』53頁以下参照
- (11) 前掲『発想法』6頁
- (12) 同上書7-15頁参照
- (13) 同上書62頁
- (14) 川喜田二郎『チームワーク』光文社(1966年)36-7頁
- (15) 前掲『発想法』21頁
- (16) 同上書22頁
- (17) 同上書22-3頁参照
- (18) 前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』121-3頁
- (19) 同上書123頁以下参照
- (20) 同上書140頁

4. KJ法導入のプロセス

KJ法を、どのような手順で演習に導入し、活用したかを示したものが図3である。ゼミの内容は、(1)問題意識の形成、(2)レポート図解作成の演習、(3)問題意識の共有、(4)日帰り合宿、(5)レポートの提出の5つに大別される。以下、その内容を紹介することにする。

(1) 問題意識の形成

問題意識の形成の段階では、参加者がゼミの内容に即した共通の問題関心を持つように、演習が開講された時点で、KJ法の説明を行うとともに、家族に関する問題意識を形成すべく、関連する文献の調査を行った。

具体的には、まず、KJ法が共同研究の方法論として生み出され、人間の創造性の開発に著しい成果を上げている事実を紹介するとともに、W型問題解決モデルに示される、その基本的構想を述べた。その際、技術的な事柄に関する説明はほとんど行わなかった。

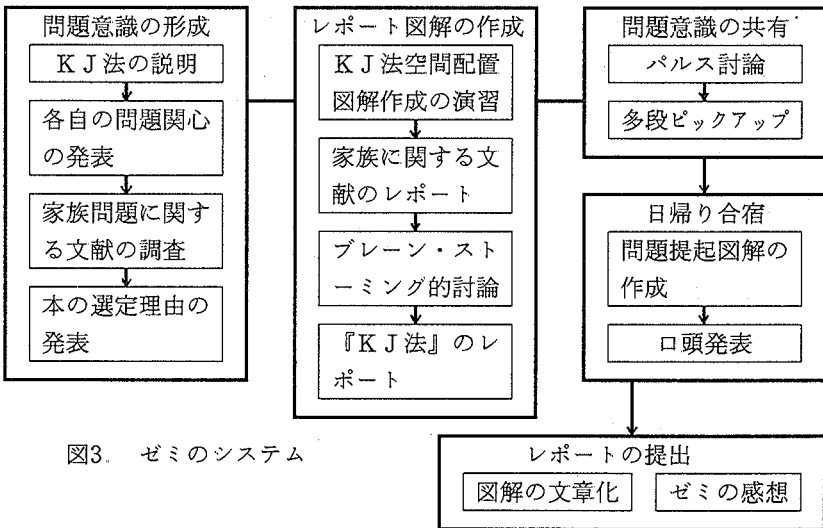


図3. ゼミのシステム

その上で、参加者が、家族問題について、どのような関心を懐いているかの

発表を行った。そして、各自の問題関心に即した文献を選び、その内容をレポートしてもらうこととした。すなわち、自分の関心のあるテーマが論じられている文献を1冊自由に選定し、その内容を報告してもらうことにしたのである。その際、重複を避けるために、本の選択の動機をレポート用紙1枚にまとめて、内容の報告の前に発表することにした。

このような手順を踏んだのは、以下のような理由に基づいている。

KJ法の説明を、その歴史と基本的な理念に限定して行い、技術的な側面の説明を最小限度にとどめたのは、KJ法の技法については、単なる口頭の説明を受けただけで、その内容を理解することは困難な側面があると思われるからである。KJ法は、その作業を実際に行わなければ、理解し得ることは難しく、技術的な事柄は、その実践の過程の中で説明する方が合理的であると考えられるからである。

また、家族問題に関するテーマの選択に際して、参加者の関心を発表してもらうとともに、関連する文献を各自が選定することにしたのは、彼らの問題意識を形成するためである。

このような手順を踏んだのは、演習に参加する学生は、全員が定位家族の構成員ではあるが、未だ生殖家族を構成していないため、家族問題に関する問題意識の広がりや乏しい傾向がみられるからである。彼らの問題関心は、自分自身の直接的な体験に限定され易く、その結果、どうしても、家族全般についての問題意識は、観念的なものになり、切実性を欠いたものになりがちなのである。前年度の演習で、このような傾向が顕著に見られたので、今回のゼミでは、問題関心の領域を拡大し、問題意識の深化を目指すために、家族問題を扱った文献をできるだけ多く取り上げることにしたのである。

そして、本の選定を各自の自由にしたのは、一種のフィールド・ワーク的要素を取り入れるとともに、主体的な取組みを期待したからである。すなわち、現場で観察するという野外研究の手法を念頭に置きつつ、本屋や図書館をフィールドになぞらえて、参加者は、家族に関する多種多様な文献の中から、自己の関心にしたがって、必要と思われる書籍を収集し、それを発表するという形式の文献調査を行ったのである。

## (2) レポート図解の作成

さて、問題意識の形成のプロセスに2回の演習をあてた後、3回目のゼミでは、レポート図解作成の訓練を行い、それから、4回目以降の演習では、前述の家族に関する文献の報告と討論をし、その後、『KJ法』の輪読を行った。

まず、レポート図解作成の訓練は、第11回KJ法学会で、川喜田研究所主任研究員山浦晴男氏が発表されたKJ法空間配置のトレーニング表を用いた。すなわち、図4に示される5枚のラベルを、その関係性が明確になるように配置した図解を作るには、どのような手順を踏んで行ったら良いかということ、実技を交えながら、教授したのである。

具体的には、まず、参加者に、5枚のラベルを配付し、それらを模造紙に貼付する作業を行ってもらった。その際、各ラベル相互間の関係性を示す記号を書き入れるとともに、各ラベルの内容を圧縮して表現した言葉やマークも記入してもらった。このような作業の後に、山浦氏の考案されたKJ法空間配置の実例表を配り、それを基にして、ラベル配置の方法を解説したのである。その内容は以下の通りである。

田舎の生活において人を必要としなくなった結果、人を愛し、人を大切にすることがはぐくまれなくなり、村人の心が利己的になって、内側から過疎化を進行させている

乞食根性を廃し、危機的状況を自覚して、独自の発想で村人自らが立ち上がることから魅力ある新しい村づくりが始まる。

都市と過疎地とのフェイスツーフェイスの交流のないことが問題である。

農山漁村を犠牲にして都市を優先した経済第一主義の過疎問題の構図は、単に、過疎対策だけでは解消できないところにきている。

過疎地を持つ「闇の力」を忘れていた。

図4. 配付した5枚のラベル

出典 山浦晴男「KJ法講座(4)KJ法の空間配置と探検ネット：標準的空間配置の実例」第11回KJ法学会



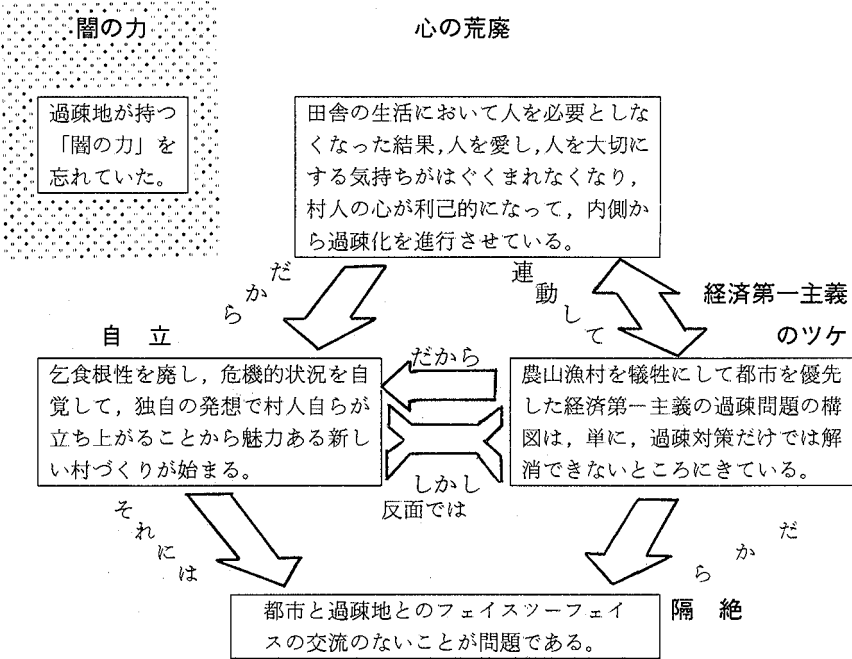


図5. レポート図解作成に用いた資料  
 出典 山浦晴男「KJ法講座(4)KJ法の空間配置と探検ネット：標準的空間配置の実例」第11回KJ法学会

まず、配られた5枚のラベルをよく読んで、その中から、何となく関係の強そうなものを2枚取り出す。そして、この2枚のラベルを、模造紙の上に、タテ・ヨコ収まりのよいと思われる所に置く。その上で、2枚のラベルの間に小さな紙きれを置き、これらのラベルの関係を示す記号を記入する。そして、この2枚が論理的につながるような接続詞や添え言葉を紙切れに書き入れる。

それが終わると、残ったラベル3枚の中から、先の2枚のラベルと関係の深そうなものを1つ取り出し、模造紙に置く。その際、先に置いてある2枚のラベルとの間に、出来るだけ多くの関係を見出すようにする。そして、新たに紙切れを置いて、それに関係記号と添え言葉を記入する。

以下、このような手順を繰り返す、すべてのラベルを配置するのである。

これらの作業が終わり、模造紙上の配置が定まると判断されれば、ラベル

を貼りつけるとともに、関係記号と添え言葉や接続詞を、模造紙に直接書き入れるのである。

そして、最後に、各ラベルの内容を示す言葉や記号をシンボル・マークとして記入するのである。図5は、この手順で作られた図解である。

以上のようなレポート図解作成の訓練を終了した後、参加者に、各自の選んだ家族に関する文献の内容を報告してもらった。

報告は、本の内容と各自の感想や意見を図解にまとめたレポートを参加者全員に配付し、その説明を15分程度で行うという形式を採った。それから、報告の中の用語等に関する質疑応答の後に、内容についての討論を、原則として、20分間を目安に行った。

この討論は、いわゆるブレーン・ストーミングの形態を採った<sup>(4)</sup>。すなわち、参加者全員が、報告に関する感想や意見を必ず発言しなければならないこととした。ただし、その際、報告者や他の参加者の発言に対する、揚足を取るような意見や直接的な批判は禁止し、反対意見は対案という形式で発表することを討論のルールとした。つまり、他者の意見に対する批判的評価を否定的に述べるのではなく、自分の見解を対案という形で積極的に発表するようにしたのである。

このようにして、参加者全員が、報告者のレポートをめぐって、多種多様な意見を出し合った後に、報告者が発言のまとめを行い、最後に、筆者がコメントをするように努めた。このプロセスでは、原則として、1回の演習で、3名の報告者がレポートをすることにしていたため、参加者は、100分のゼミで、最低3回は発言することが義務付けられたのである。

以上の家族問題に関する文献のレポートは、計4回の演習で終了した。

それから、川喜田博士の『KJ法』の輪読に取り組んだ。その方法は、参加者全員が、それぞれ担当する箇所を読んで、その内容を、家族問題の報告の時と同様に、図解にまとめて発表することとした。その際、報告者自身の疑問点や他の参加者からの質問については、筆者が答えることにした。

このような形で、『KJ法』の輪読を行ったのは、筆者の一方的な説明よりも、参加者自身が『KJ法』を読んで発表する方が、能動的な取り組みが期待

されるのではないかと考えたからである。また、質問に対する応答を筆者が担当したのは、KJ法は、実際に研修を受けた者でないと具体的に解説できない点があると思われるからである。

時間的制約のため、このような輪読は、計3回の演習で終了することになったが、KJ法の概要を、各参加者は把握したように思われる。

### (3) 問題意識の共有

『KJ法』の輪読が終了したのは、冬休みの直前であった。12月最後の演習の時間に、今後の演習の進め方について協議し、1月に、集中的に時間をかけて、KJ法の研修を行うことにした。その際、KJ法の問題提起ラウンドの図解を作ることにし、そのテーマは「現代家族の問題点を考える」と決めた。

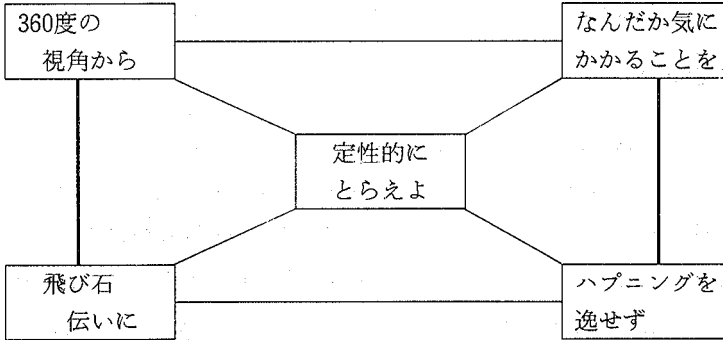
さて、KJ法の本来の趣旨を考えれば、テーマは、参加者の意見を基にして、決定することが原則である。しかも、そのテーマは、できるだけ具体的に限定された内容であることが望ましい。しかし、今回の演習では、参加者全員の意見を考慮してテーマを決定したのではなく、筆者が、テーマを提案し同意してもらおうという形式を採った。このようなテーマの決め方をしたのは、昨年、試行的にKJ法の実習をゼミで行った際、最も関心のある事柄を自由に述べてもらい、多数の参加者が希望し支持するものをテーマにしようとした。ところが、学生の希望するテーマの大半が、演習の題目の趣旨を逸脱すると考えられるものであり、学生の希望に沿うと表明していたにもかかわらず、テーマの修正をせざるを得なくなったからである。

また、冬休みの間に、各自、10項目を目安に、現代家族の問題点を考えてきてもらうことにした。問題点は、これまでのゼミで各自が報告した家族問題に関する文献を中心にしつつも、できるだけ広い視野で様々な方向から見つけてくることを原則とした。すなわち、図6に示される川喜田博士の提唱される探検の5原則を紹介し、文献だけではなく、家族や友人からも取材して来るようにと要請したのである。

具体的には、身近で、切実な事柄で、しかも解決のモデルが見出せない問題を、1項目毎に、1つの文章にまとめてもらうことにした。その際、文章は40

字程度とすることにした。そして、主語、述語を明確にし、その語尾は「・・・したい。」「・・・が気になる。」「・・・が問題だ」という表現を目安にすることと定めたのである。

図6. 探検の5原則



出典 前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』217頁

それから、後述する日帰り合宿の直前に、「現代家族の問題点を考える」というテーマでパルス討論を行った。

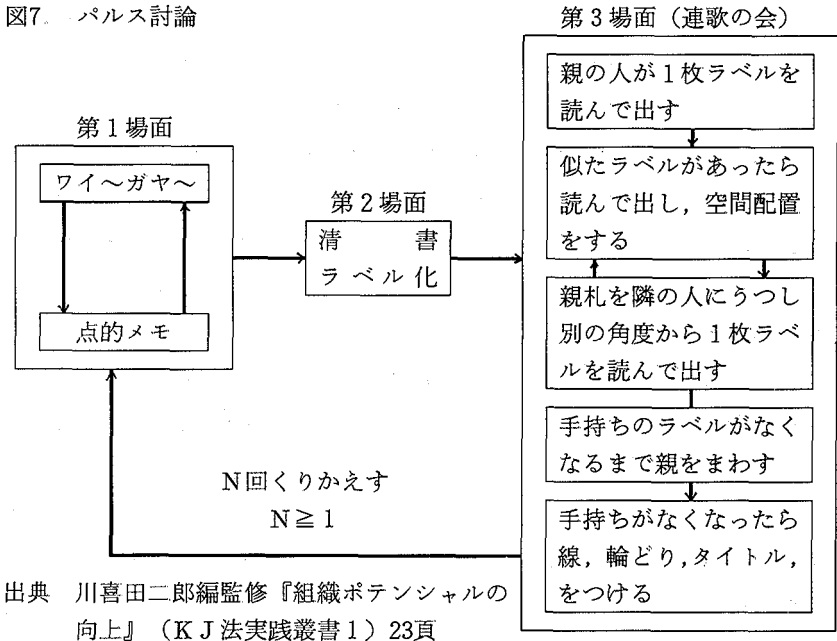
パルス討論は、川喜田博士の考案された討論形式の1つで、図7は、そのプロセスを図解化したものである<sup>2)</sup>。

今回の演習では、まず、各自が冬休みの間に考えてきた問題点を読み上げてもらった。その際、他人の意見を聞いている間に、それに触発されて新しい問題点を考えついた場合には、その内容をメモして置くことにした。

このメモは、KJ法で使われる「点メモ」と呼ばれる形式のメモで、「ハッと印象づけられたその場所その時に、パッと書ける。」し、「早口でしゃべる相手の発言でも書ける。」ため、「記録しながら討論に参加できるばかりか、時にはその点メモ記録のために、なおいっそう鋭く発言できる」というメモの方法である<sup>3)</sup>。

この「点メモ」は、「短期でも正規に訓練したほうがよい」<sup>4)</sup>のであるが、今回のゼミでは、訓練のための時間を割く余裕がなかったため、その概要を口頭で説明し、研修抜きでその場で活用してもらった。

図7. パルス討論



それから、各自の発言が一巡した時点で、この「点メモ」を清書してもらい、再び、問題点として発表してもらった。KJ法の正規のパルス討論の場合は、図7のように、第2場面のラベルの清書から第3場面の空間配置に移行し、その上で、再び、第1場面の討論に戻るのであるが、今回は、その手順を変更し、第2場面から第1場面に移行したのである。

この間の議論は、前述のブレーン・ストーミングの精神に立脚することを原則とするとともに、自分の意見やアイデアは、「点メモ」として、必ず、自分で記録して置かねばならないが、他人の意見は一切メモしないこととした。すなわち、「他人の発言は、その他人自身が点メモを行っているので、その記録まで気にする必要はない」が、「その反面、自分の意見の方は、発言のチャンスのないものまで点メモしておくのである」<sup>(5)</sup>。

このような第1場面の討論と第2場面の清書化のプロセスを2回繰り返した後、第3場面の連歌の会に移行し、模造紙の上に、各自のラベルを配置しても

らった。すなわち、現代家族が抱えている問題点だと各自が考えた事柄を、すべてラベルとして対象化し、一目瞭然となるようにしたのである。

こうして配置されたラベルの枚数は、全部で117枚だったため、続いて、多段ピックアップを行い、図解化する際に用いる枚数を絞ることにした。

この多段ピックアップは、関連する多数のデータから一定のデータを選択するために開発された技法である<sup>6)</sup>。問題を提出した参加者が、テーマを念頭に置きながら、空間配置されたラベルの中から、KJ法でまとめてみたいラベルを選ぶのである。

今回の演習では、参加者に、問題の基礎構造を把握するために、できるだけ異質な内容のものを、しかも、各自が「なんとなく」気にかかるラベルを選ぶという多段ピックアップの原則<sup>7)</sup>を説明した後、作業に移った。

まず、各自に、模造紙に配置されたラベルを良く読んでもらい、問題として取り上げたいと感じるラベルの右上に、赤ペンで○印を記入してもらった。この段階では、一人当たりの記入する数は限定せず、各自が後悔しないように何枚でもよいが、○印のついたラベルには、重ねて印を付けないとの多段ピックアップのルールにしたがった。

つぎに、○印のついたラベルの中から、各自が、再び、問題として取り上げたいと感じるラベルの右上に○印をつけてもらった。すなわち、この段階で先に○印のつかなかったラベルは選択の範囲外とし、印のついたものの中から、更にピックアップを行ったのである。そして、○印が再び記入されたものを対象にして、3回目のピックアップを行った。この段階で、ラベルの枚数が53枚に絞られたため、4回目のピックアップでは、各自が取り上げたいと感じるラベルを3枚選ぶことにした。

その際、各自が、1回に1枚ずつ×印をラベルの左上に記入することとし、この作業を3回繰り返した。その後、×印のつかなかったラベルの中から、どうしても取り上げたいと思うラベルの希望を参加者に尋ねた。すると、2枚のラベルの追加を望む者が居たため、そのラベルにも×印を記入した。以上で、ピックアップの終了を宣言し、選択された41枚のラベルを用いて問題提起図解を作成することにした。

このように、ラベルの枚数を限定し、扱う問題項目の数を減らすことにした理由は、時間の制約があるため、多くの問題を整理することは困難であると思われたからである。また、ラベルの選択に際して多段ピックアップを活用した理由は、この作業を通じて、参加者は各自の提出したラベルをよく読むことになるので、問題意識を共有化することになると考えられるからである。その上、この方法によって選択されたラベルは、「誰かが、その価値を深く認めたものばかりとなり、しかも、各人独特の感受性に充分応えた、いうなればゴツゴツとひと癖持ったラベルを、何枚も含んでいる」ため、「この選択に加うるにKJ法による組みたて作業が厳正であると、できた作品は全員の心を深く打つ、啓発性にすこぶる富んだものとなる」からである<sup>8)</sup>。

このパルス討論と多段ピックアップは、日帰り合宿を行う直前の午後4時30分から午後6時30分までの間に、香川大学で行い、それから会場を移動して合宿を行ったのである。

#### (4) 日帰り合宿

さて、ラベルを41枚に絞った後に、それらを素材として、先に紹介したKJ法の狭義の1ラウンドの図解作成の手順にしたがい、問題提起図解を作成することにした。この作業は、香川大学セミナーハウスで2日間にわたって行った。

そのスケジュールを紹介すると、1日目は、午後7時から午後9時まででラベル集めと表札作りを行い、2日目は、午前9時30分から、その作業を続行したのである。午後3時頃からは、図解の作成をする者が現れ、午後6時過ぎには、全員が図解作成を終了した。それから、出来上がった図解の口頭発表を行い、午後9時に解散したのである。

この図解作成は、KJ法本部が主催している研修講座と同様に、泊まり込みで行いたかったのであるが、セミナーハウスは宿泊が禁止されており、また、参加者の中には、夜、アルバイトをする者がいたりしたため、宿泊を伴わない、日帰り合宿となったのである。

以下、その内容を具体的に説明すると、第1日目は参加者全員が、最初の段階のラベル集めと表札づくりに取りかかった時点で終了することになった。こ

の間、参加者全員の表札づくりの表現の指導にあたったが、その大半は集めたラベルの文章を足し算的に結びつけたものであった。そこで、各参加者毎に、それぞれが作成した表札の中から幾つかを選び、そのラベルに即して、表現の仕方を説明した。そして、その場で訂正できなかったラベルについては、筆者の説明を参考にした上で、各参加者が翌日の朝までに書き直して来ることにしたのである。その結果、参加者は、約15枚近くの表札ラベルを考えてくることになったのである。

翌日は、まず、昨夜、各自が考えてきた表札ラベルの表現のチェックを行った。その後、ラベル集めと表札ラベルづくりを繰り返し、41枚のラベルが、数束にまとまるまで、この作業を続けた。この作業の進行状況には、若干の個人差がみられたが、遅い者でも午後4時過ぎには、ラベル集めは終了した。ラベル集めが終了次第、各自、束になったラベルを模造紙に空間配置し、図解を作成する作業に移り、全員が、6時過ぎには、問題提起図解を完成させたのである。写真1・2・3は、彼らが、ラベルを空間配置し、図解を作成している模様である。

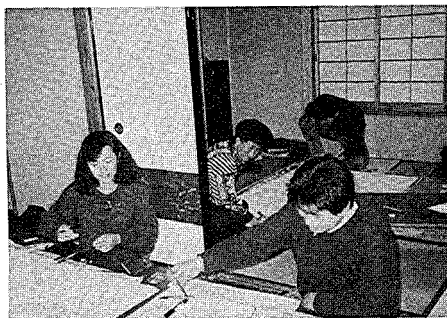
その後、一人当たり15分以内で、図解の内容を口頭で発表するとともに（写真4）、ゼミの感想を述べてもらうことにした。

図解の説明は、どの部分から始めてもよいこととするとともに、全体の構造をできるだけ判り易く説明してもらうことにした。その上で、図解作成をして気がついた事を、意見として発表してもらった。また、感想は、KJ法についての感想とゼミに参加した感想を述べてもらい、その後で、若干の質疑応答を行ったのである。そして、全員が発表を終えた後、これらをレポートとしてまとめるように要請したのである。

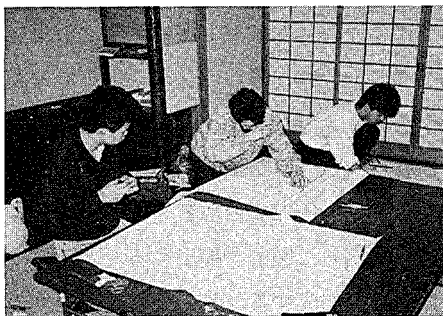
#### (5) レポートの提出

さて、この演習の単位の認定並びに評価は、これまでの出席を考慮するとと





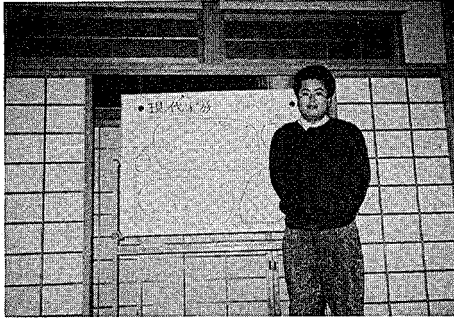
写真(1)



写真(2)



写真(3)



写真(4)

もに、日帰り合宿で作成した図解とその図解を文章化したレポートに基いて行うことにした。そして、参加者に対して、以下のようなレポートの提出を義務付けた。

まず、ゼミの最初に、各自が採り上げた家族に関する文献の報告を、B5版のレポート用紙で2枚以内でまとめる。

つぎに、合宿で作成した図解を提出する。とともに、この図解の概略を、新たにB4版の模造紙で作成する。その図解は、41枚の元ラベルを記入するのではなく、それらをまとめた表札ラベルを中心とし、各自が合宿で作成した問題提起図解の構造が把握できるような図解とする。

それから、問題提起図解の内容を、B5版のレポート用紙で5枚以内で文章化する。つまり、日帰り合宿の際に、各自が口頭で発表した内容を文章にまとめるのである。

その上で、KJ法についての感想と、ゼミの内容に関する感想を書くように要請したのである。

そして、最後に、参加者各自の自己紹介を、B5版のレポート用紙1枚にまとめてもらうことにした。

このように自己紹介をも、レポートとして提出するようにしたのは、後日、参加者全員のレポートを製本して、各自に配付しようと考えたからである。参

加者全員に、KJ法の技法と、それを用いて作成した作品が、手元に記録として残るようにと配慮したのである。

- (1) ここでのブレーン・ストーミングは、KJ法の精神に基いて行われるブレーン・ストーミングである。前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』347頁以下参照
- (2) このパルス討論の形式は、筆者が研修を受けた時点のものであり、その後、種々改善されている。前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』359頁の図解では、第3場面の中でも点メモが活用されるなど、若干異なっている。ここでは、実際に今回の演習で用いた方法の図解を紹介している。なお、これは、KJ法自体が「できあがってから普及したものではなく、普及しつつ実践の中で成長していった」(前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』まえがきvi) ためであるが、パルス討論の基本的な内容自体が大幅に変更されたものではないと考えられる。
- (3) 前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』248頁以下
- (4) 前掲『『知』の探検学』119頁
- (5) 前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』357頁
- (6) 多段ピックアップについては、前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』275頁以下参照
- (7) ラベルの選択を「なんとなく」という情緒的な基準で行うことは、非科学的であるという批判に対して、川喜田博士は、「評価の基準を意識的に合理的な感覚に狭く限定することは、かえって危険」であり、適切な選択を人間が行おうとする時には、「そのほかに桁ちがいに豊富な潜在意識のないし、無意識的な情報やそれらをまとめる論理(ないし前論理的論理?)をも併用している」のであり、また、「私の数知れない経験から察すると、そうではない」と述べている(前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』276頁以下)。
- (8) 前掲『KJ法—渾沌をして語らしめる』282頁

以下、次号